

教育プログラムの概要及び採択理由

機 関 名	大阪大学	申請分野(系)	医療系
教育プログラムの名称	医科学修士の健康医療問題解決能力の涵養		
主たる研究科・専攻名	医学系研究科医科学専攻		
(他の大学と共同申請する場合の大学名、研究科専攻名)			
取組実施担当者	(代表者) 磯 博康		

[教育プログラムの概要]

医科学専攻の対象は、原則的に医学科以外の四年制学部・学科を卒業した者であることから、入学年度の前期に医学の基礎的知識を履修させるために医学分野の諸概論(人体形態機能学、分子医学、病理形態学、集団社会医学、臨床医学)を必修として課し、入学年度の後期から各研究室でのセミナー・勉強会に参加しながら課題研究に取り組むカリキュラムで教育が行われてきた。しかしながら、研究科規定の第1条2-(2)に掲げる医療系の人材の育成には、人間社会の枠組みを律する人文社会科学系の知識・技能の教育が必要である。また、わが国では少子高齢社会を迎え、医療現場での改革が進められている現在、医科学の専門知識、技能の習得のみならず、健康医療分野の諸問題に対処し解決する能力が益々求められている。

そこで、本教育プログラムは、医科学専攻に社会医学講義として、健康マネジメント分野の12科目、医療マネジメント分野の8科目、人文社会科学分野の18科目を選択科目として開講し、かつ従来の課題研究に、健康医療関連施設の実習、インターンシップや、国内学のフィールド調査を組み入れ、専門応用能力、プロジェクト企画・マネジメント能力、健康医療問題の解決能力の涵養を行うとともに、学生の修士課程終了後のキャリアパスの幅を広げることを目的とした。さらに、平成20年度には社会人入学制度として、土曜日や平日夕刻の講義等を開講し、医療系大学の卒業者のみならず、医療系事務等に従事する社会人に対しても門戸を開放する。そして、多様なバックグラウンドを有する学生の教育を系統的に行い、健康医療の諸問題の解決能力に富んだ医科学専門家の育成を行う。

医科学専攻の現状のカリキュラムと本教育プログラムによる改変後のカリキュラムを下図に示す。

改変前

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
1 年次	医学分野概論講義				課題研究							
2 年次	課題研究									研究論文 (発表・提出)		



改変後

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
1 年次	医学分野概論講義				課題研究 (インターンシップ・フィールドワークの活用)							
					① 1~4 時限 社会医学講義 (一般学生)							
					① 5 時限 社会医学講義 (一般学生・社会人)							
									② 土曜日 社会医学講義 (社会人)			
2 年次	課題研究 (インターンシップ・									研究論文 (発表・提出)		
	② 1~4 時限 社会医学講義 (一般学生)				フィールドワークの活用)							
	②③ 5 時限 社会医学講義 (一般学生・社会人)				③ 土曜日 社会医学講義 (社会人)							

履修プロセスの概念図(履修指導及び研究指導のプロセスについて全体像と特徴がわかるように図示してください。)

対象学生：

履修プロセスとして、まず、対象学生は、従来の医科学関連分野の大学の卒業生(保健学、農学、薬学、理学、工学等)に加えて、社会人(医療系大学の卒業生、医療系事務者等)とする。

履修指導：

医学分野の諸概論(医療系大学の卒業生は、全部あるいは一部既履修とみなせる)を履修後、健康医療の諸問題の解決能力の涵養のため、基本となる講義科目として、倫理学、コミュニケーション学、疫学・医学統計学、等に関する総論を選択履修することができる。

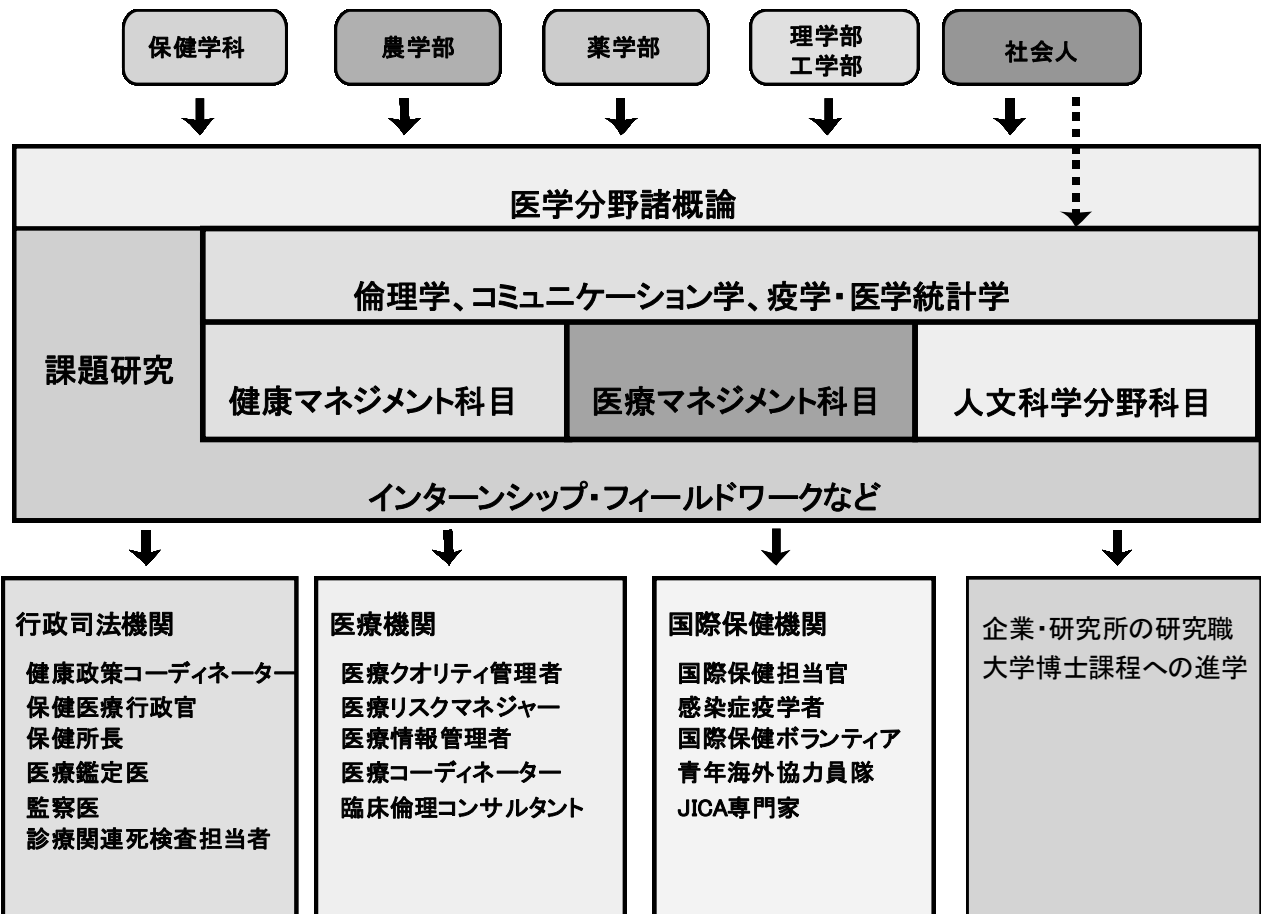
さらに、問題解決能力の涵養のための、応用的な講義科目として、健康マネジメント分野、医療マネジメント分野、人文社会科学分野の講義を選択履修することができる。

研究指導：

一年次の後期、二年次の前期、後期の課題研究においては、従来の実験が中心の課題研究に、健康医療関連施設における実習、インターンシップや国内学外のフィールド調査を積極的に取り入れる。その際、複数指導教官体制を維持するとともに、WEB・メール等の指導体制を強化して、社会人学生の研究指導の強化を図る。

修了後の進路：

修了後の進路としては、企業、研究所の就職や博士課程大学院の進学以外に、行政、司法、医療機関、国際保健機関等、多様な進路の開拓につなげる。



<採択理由>

大学院教育の実質化の面では、多様な背景の学生を対象とした医科学修士コースで文理融合の均衡のとれた医科学専門職業人育成を目指しており、目的に沿った体系的な教育課程が具体的に示されている。同修士コースは約30年の歴史を持ち、今回の提案は同大学の教育理念、方針にも十分沿っており斬新で魅力的な計画とすることができる。現在までの実績からも幅広い分野で活躍できる人材育成が期待でき、実現の可能性が高いと考えられる。しかしながら、文理融合の一環として、理工系の学生を含む多様な背景を持つ学生の教育は実際には難しいことも予想されるので、常に実現に向けて、プログラムを改善することなどに留意しなければならない。

教育プログラムについては医学・健康・医療の諸問題について自己解決可能な能力を養うことを強調し、地域の保健医療、行政司法、研究機関などの現場と結びつけたプログラムのため実践的な人材の育成が期待される。しかしながら、問題解決能力の評価に関する基準と評価方法の記載や教育プログラムにおける健康教育的能力の育成などの具体化にも留意しなければならない。